

CO₂固定化で研究チーム

キックオフミーティングを開催

泥土リサイクル協会

(一社)泥土リサイクル協会(愛知県稲沢市、木村孟理事長)は3月8日に都内で、「泥土リサイクルにおけるCO₂固定化研究チーム」のキックオフミーティングを行った。

同協会ではこれまで建設汚泥の自ら利用を推進することでCO₂排出削減に貢献してきた。今後はさらに、CO₂吸着・固定化にも寄与することでカーボンニュートラル社会の実現に向けて活動を展開していくという。研究チームの運営を事務局次長の西川美穂氏が担当し、構成メンバーは委員として、同協会の理事企業の技術者として、安藤・

鹿島建設の土木管理本部・土木工務部・環境緑化造成グループ担当部長である小澤一喜氏が座長を務める。アドバイザーを国立環境研究所室長の着倉宏史氏、大阪大学大学院の乾徹教授、福岡大学の藤川拓朗助教が務め、外部アドバイザーとして(財)電力中央研究所研究推進マネージャである井野場誠治氏と主任研究員の小川翔平氏が務める。キック

オフミーティングの最初に野口真一事務局長は「当協会は来年で20周年を迎える。資源循環社会の創造という観点から、さらに付加価値が高い環境負荷軽減に貢献できることを考え、CO₂の固定化について取り組んでいくこととなった。皆さんの力をお借りして研究

開発を進め、世の中の役に立てればと考えている」と述べた。具体的には、同プロジェクトと平行に西川氏が共同研究者として、「建設分野におけるカーボンニュートラルの実現に資する炭酸塩化した循環資材を活用した泥土リサイクルの社会実装に向けた研究」をテーマとして研究開発を計画してお

り、一年目は、炭酸塩化した循環資材(石灰灰、PS灰、再生石膏粉など)を主原料とする固化材の試作ならびに実用に向けた製造方法の検討や炭酸塩化した循環資材を主原料とした固化材を用いた改質土の性能評価からスタートする。

キックオフミーティングでは、井野場氏と小川氏から「石炭灰を

活用したCO₂固定の試み」としてプレゼンテーションが行われた。ここでは、埋め立てられている石炭灰や焼却灰などを炭酸化させることでCO₂を固定化させることについて、現在の研究結果などを整理し、さらに石炭灰、バイオマス灰、焼却残さそれぞれについての炭酸塩化試験結果などからCO₂固定量などを確認した。他にも石炭灰によるCO₂固定の利点についてや燃焼灰の含水比がCO₂固定量に与える影響などを確認し、石炭灰等によるCO₂固定量の見積もりなどを発表した。今後は、大気中のCO₂固定の可能性や掘り起こし利用の可能性について研究を進めていく。

キックオフミーティングの様子



務め、このなかの担当者7人が

建設、西松建設、五洋建設、大成

建設、西松建設

建設、西松建設

建設、西松建設

建設、西松建設